

歴史的節目を未来の糧に 資源活用で挑む地方創生

高速交通網の拡充がもたらす意義

宇和島市、八幡浜市、大洲市、西予市、内子町、伊方町、松野町、鬼北町、愛南町の4市5町からなる南予地域に伊予市を加えた10市町では、現在、地元の食・自然・歴史文化などを全国発信する「えひめいやしの南予博2016」が開催中だ。期間は平成28年3月26日～11月20日までの約8カ月間。かなりの長丁場だが、参加各市町では後述するように、それぞれの地域性や特色を生かした、さまざまなイベントを随時実施する。

愛媛県は東予地域、中予地域、南予地域に区分されるが、宇和島市が属する南予地域は、標高1000m級の山々が連なる荘厳な四国山地が東西を横断する地形のため、昔から各市町を結ぶ交通の便に恵まれていなかった。

「そのために、広域圏と位置付けられてい

る割には、地域一帯の連帯性、一体感がなかなか生じにくい面もありました。でも逆にそのことが、地域内の各地に独自性の強い歴史文化を醸成する結果をもたらすことにもなったといえます。

しかし、平成24年3月に四国横断自動車道・宇和島北IC～西予宇和ICが開通したことによって、松山市から内子、大洲を経て宇和島に至る交通アクセスが格段に良くなりました（※松山ICから宇和島朝日ICまで約70分、JR特急・宇和海による松山～宇和島間も約80分）。南予地域という広域圏を一括りで考えるとき、この高速交通網の整備は、地域一体化において非常に大きな意味を持ってきます。今後の南予博の盛り上がりについても、そのことが大きな推進力の一つになっていくはずだ」

そう語るのは石橋寛久・宇和島市長である。四国の瀬戸内側を結ぶ高速交通網は、松山自動車道（四国中央市から宇和島市）と高松自



いしひろひさ
石橋寛久
宇和島市長

動車道（鳴門市・坂出市～高松経由・四国中央市）、さらには徳島自動車道（徳島市～四国中央市）などが連結し合って、四国横断自動車道や四国縦貫自動車道などを形成している。

そして、県都・松山市と県西南端に近い宇和島市とが高速交通網で直接結ばれたことにより、南予地域が名実ともに広域圏としての環境に整えられるに至った。その結果、例えば観光面においては、松山市を起点に、南予地域の各所に立ち寄り、還流す



現存12天守の一つに数えられる宇和島城

るという1〜2泊程度(日帰りも可)の旅行プログラムが立案しやすくなるなど、その効果はさまざまな面に波及している。

合併から10年を経て、 進む市民の一体化

「えひめいやしの南予博2016」もこうした高速交通網の充実の成果を存分に生かして

いる。実際、各市町の独自プログラムと広域的なプログラムが縦横に交差する南予博の実施スタイルも、まさにこうしたアクセス環境の飛躍的な改善が背景にあればこそ成り立つものだといえるだろう。

期間中に行われるイベント数は総計250以上(期間中にさらに増える予定)とされるが、主に次のようにカテゴリー分けされている(えひめいやしの南予博2016公式資料より)。

◆**セレモニーイベント**【オープニングイベント「南予いやしの祭典・平成28年3月26日」八幡浜市および伊方町で開催／クロージングイベント「南予観光サミット(平成28年11月20



伊達家のルーツ仙台のシシ踊りを起源とする「八ツ鹿踊り」

日)宇和島市で開催】

◆**広域コアイベント**【南予地域に共通する素材をテーマ(食・食文化・サイクリング・アウトドアなど)に、広域の魅力を発信】

◆**地域コアイベント**【市町ごとの特色ある素材をテーマに、南予の魅力や多様性を発信。新規イベントや観光プログラムの開発、既存イベントの拡充などによる開催を目指す】

◆**地域企画イベント**【各市町が独自に開催するイベントや地域のまつり、他県との連携によるイベントのうち、南予博の趣旨に合うイベント等を地域企画イベントとする】

◆**自主企画イベント**【南予地域の活性化に資する活動を行う住民グループやNPO、企



重要文化的景観の選定を受けた遊子水荷浦の段畑



宇和島伊達400年祭(馬上の伊達秀宗役は石橋市長)

業、団体等が実施する、地域資源を活かした観光まちづくりや移住・定住促進に資するプログラム」

これら各カテゴリーのイベントなどを地域内で随時実施することにより、「南予ブランド」を「道後ブランド」「しまなみブランド」に次ぐ愛媛県第3のブランドとして育成および確立を図る。併せて、今後、同地域において長期にわたって行われるであろう、観光を核にしたまちづくり、広域周遊の仕組みづくりの礎とすることが、この長期にわたる広域イベントの最大の眼目といえるだろう。

取材した5月半ばの時点では、地域コアイ

イベントが2つ(秀宗公入部伊達五十七騎大武者行列、楽市楽座にぎわい市)のほか、広域コアイイベントが2つ(南予の食を発信する《南予プレミアム》、サイクリング企画《ツールド・なんよ・8デイズ》)が開催されただけ

であったが、そうした公式行事の性格の強いイベント以外に、市民参加の色彩が濃い自主企画イベントが今後かなり予定されている。

具体的にはNPOや漁協女性部、地域づくり協議会、各種任意団体、スポーツクラブ、商工会などを母体とする各種イベント企画11事業が行われることになっている。こうした自主企画イベントは今後さらに増える見込みだという。

宇和島市では、昨年、合併10周年を迎えた。同時に宇和島藩の初代藩主・伊達秀宗(伊達政宗の長男)が1615年(慶長20年)に宇和島入りして丸400周年という歴史的な節目も迎え、関連記念行事の開催で年間を通して



宇和島市立伊達博物館と名勝・天救園の庭園

にぎわったが、こうした歴史的節目を祝うイベントの積み重ねを通じて、市民の参画意識が徐々に大きくなってきた面もあるようだ。特に、今回の南予博に、その傾向が色濃く出ていると、石橋市長も強調する。

「宇和島市は平成17年に旧宇和島市、旧北宇和郡吉田町、三間町、津島町の1市3町で合併しました。以前から日本一のみかん栽培のまちとして知られてきた吉田町は、宇和島藩時代の支藩(伊予吉田藩)というつながりもありましたが、例えば伊達家入部400年の記念事業といっても、一番南の津島町などではもうひとつピンときていない傾向があったように思います。だから一口に一体化といっ



九島大橋開通式、島民のみなさんの渡りぞめ

でも、なかなか難しいなど痛感してまいりましたので、始まったばかりの南予博に、各地域から予想以上に市民団体などの参画が見られているという現実は、とても嬉しく思います(石橋市長)

合併以来、厳格な行財政改革を推進して成果を着実に挙げつつも、同時に石橋市長が「常に心にかけてきた」という市民の一体化への粘り強い努力の積み重ねが、合併10周年や伊達家入部400年、南予博などの地域を挙げたイベントが連続して実施されることにより、さらに刺激を与えられて、少しずつ実を結び始めたといえるかもしれない。

宇和島市悲願の九島大橋開通

今年の4月3日には、宇和島市で「九島大橋の開通式」が行われた。写真にあるように、みんなで手をつなぎ、満面の笑みで九島大橋を渡る島民・市民の皆さんの様子が、この記念碑的事業の意義の大きさを如実に物語っている。

「宇和島港の入口に浮かぶ九島と本土を結ぶ九島大橋(468m)の開通は、私が平成13年の市長選に初めて出た時からの大きな公約の一つでした。九島大橋の事業企画そのものは

半世紀以上も前から何度か具体化しては挫折してきた、宇和島市の懸案事項でした。それだけに、ようやく完成したということには直接担当した市長としての感情だけでなく、宇和島に生まれ育った市民の一人としても、大きな感慨を覚えております(石橋市長)

九島は周囲約12kmの離島で、島内



時間がゆっくり流れる九島



宇和島港に残る大規模造船所



鮮度と味に定評のある宇和海の養殖魚(鯛、マハタ、ブリ)

して採択されることとなった。その結果、平成24年に橋梁本体の工事を愛媛県に委託する形で建設工事に着手。約4年の歳月を掛けて、完成に至ったのだった。

「九島大橋の存在は、島民の皆さんの生活面の不便解消や、医療・福祉などの行政サービスを向上させる意味合いだけでなく、災害時には島民の皆さんの避難路、支援物資の運搬路としての役割も果たしてくれることでしょう。」



ふるさと納税の返礼品でも人気の「宇和島鯛めし」

3カ所の集落に、約9000人が暮らしている。宇和島市に5つある有人離島のうち面積・人口とも最大で、日本最後のニホンカワウソの捕獲地(昭和50年4月)としても知られている。

九島大橋が完成するまでは、本土とはフェリー(1日9便)で結ばれていた。だが荒天時には運休することも多く、医療・就学・経済活動そのほかの生活面で島民のハンディは大きく、本土との架橋は宇和島市にとって悲願だった。

そこで石橋市長は、島民の強い要請を受けて、市の事業として推進する道などを模索。愛媛県および国土交通省との粘り強い折衝を積み重ね、ついに平成22年に国の補助事業と

「九島大橋の存在は、島民の皆さんの生活面の不便解消や、医療・福祉などの行政サービスを向上させる意味合いだけでなく、災害時には島民の皆さんの避難路、支援物資の運搬路としての役割も果たしてくれることでしょう。」

そういう意味ではまさに『命の懸け橋』ともいえますが、同時に受け入れ体制なども、事情の許す範囲内で少しずつ整えていけば、交流人口の拡大も期待できます。何といってもニホンカワウソの最後の捕獲地にふさわしい豊かな自然環境と、訪れる人を癒さずにおかない風光や人情もたっぷりある所です。今後の観光振興においても大きなピースの一つになっていく可能性があると考えます(石橋市長)

取材の際には宇和島駅前まで調達したレンタ

サイクルで、島内を1周する機会を得た。週末で観光客の姿も随所で見ることができたが、平地の少ない島内には外部から訪れる人々のための駐車スペースはほとんどない。そのため車の乗り入れは制限されている。自転車でのゆったりと回れたのは行き交う車が少なかったせいもあるだろう。

九島で今後どのような開発計画が実施されていくかについて予断はできないが、徒歩や自転車で橋を渡るだけでも、離島の雰囲気はそのまま、しかも手軽に味わえる環境は、ほかに類例の少ない、とても貴重なものだ。個人的にはいつそのこと観光目的の外部からの車による訪問は制限したままにしておいたほうがいいのではないかとさえ、思えて



毎年5回行われる定期闘牛大会(市営闘牛場)

移住・定住の促進に 不可欠な魅力が満載

くるほどだった。

「宇和島市にとって現在最大の課題・懸案は、これは全国共通のことでもありませんが、やはり人口減少をいかに鈍化させ、交流人口はもちろん、移住・定住人口をいかに増やすかにあります」と、石橋市長は語る。

合併時に約9万2000人だった宇和島市の人口は毎年1000人単位で減り、現在は8万人を切っている(今年3月末の推計で約7万9000人)。もちろん、人口減少対策

としての移住・定住促進に向けての支援・助成は、各種行っている。また最大の地場産業である農業・漁業についても、みかんをはじめとする高付加価値作物の栽培を目指す新規就農支援や、養殖漁業を中心にした新規就業者への支援も手厚く行っている。さらには林業などについても雇用の場の創出を図り、起業希望者への支援も充実している。

そうした対策の効果もあって、実は宇和島市への移住者の数は、合併以来、常に愛媛県内でもトップクラスを維持している。とはいえ、それでも人口は減っていく。全国共通の課題とはいえ、悩ましい限りではあるが、これまでご紹介してきたように、交流人口の増大による活性化などにも尽力し、成果を挙げつつあるのも事実だ。実際、宇和島市にはその推進力となる宝物(魅力)が豊富にある。

例えば全国の港湾都市が誘致に全力を挙げているものの、なかなか新規獲得が難しい外国クルーズ船が、宇和島港では近年、年間10回程度寄港している。

「大型クルーズ船ではなく1万トンクラス未満の船です」と石橋市長は説明するが、これらクルーズ船の多くはフランスの船会社の所有船で、船客もフランス人をはじめとする欧米人がほとんどを占めるという。ツアーの航路的に宇和島港は絶好の位置にあるからと謙遜されているが、小型クルーズ船で外国旅行を楽しむ層は欧米でも「旅の達人」が多いと業界では見なされている。宇和島港に入港す

ればたとえ半日観光でも、旅の達人たちを満足させるに足る、宇和島城などの歴史的遺構、新鮮な魚介や柑橘類、日本一の産出量を誇る真珠など、優良コンテンツが豊富に存在している。

南予博が終われば来年は「愛顔(えがお)つなぐえひめ国体」が控えている。九島の取り扱いも含め、ミシランガイドの本場フランス人にも密かな人気のこのまちの魅力を、全国はもちろん、どう世界に発信していくのか? そして、ゆくゆくは移住・定住人口をいかに増やしていくのか? 今後の宇和島市の取り組みがますます楽しみになってくる。

(取材・文 遠藤 隆 / 取材日 平成28年5月13日)



うわじま牛鬼まつり・親牛鬼パレード